

花園妙心寺

ご門山大幸



# すいせんの言葉

臨濟宗妙心寺派  
社 会 部 長

田 中 鉄 宗

京都駅から山陰線に身をゆだねますと、十五分ほどで花園駅に着きます。つぎの駅が嵐山といつて、春夏秋冬ともに風光明媚な嵯峨です。この花園から嵯峨一帯にかけての広い地域が、歴史上にも文学上にも有名なところで、史蹟や古跡名勝がたくさんあります。

花園もふるくから著名なところで、六百五十年ほどまえでは、九十五代花園天皇さまの離宮でありました。天皇さまは後に出家して、花園法皇さまと申しあげるのでですが、たしかに花園法皇、ことに臨濟宗に篤く帰依なされ、いへん仏教、ことに臨濟宗に篤く帰依なされ、そのころ岐阜県の山深いところで、一生懸命に仏道の修行をしておられた偉い坊さんを京都に召し出され、離宮を改めて寺とし、この坊さんを開山となされたのです。ご開山さまを無相大師と申しあげ、寺を正法山妙心寺といい、臨濟宗妙心寺派の総本山として、日本国中に約四千の末寺を有しています。

ご開山さまは人並みすぐれた賢い方で、幼少のころ学問や仏道修行のため出家されました。ご出家後六十四年を経て、八十四才で亡くなりましたが、この六十四年こそは実に大師が仏法興隆発展のため、子弟育成のため、

民衆教化のために心魂を傾けられたのです。ご開山さまの御靈をおまつりする廟を微笑庵

と申しますが、そのなかには数百年来消えたことの無い常灯明が輝いています。その灯の如くご開山さまの御遺徳は、いまもなお脉々として受けつがれ、譲られていくのです。

ご開山さまはその性格が極めて無欲淡泊で世のなかのことにかかわったり、武家公家に媚びて出世を夢みたり、財をたくわえたり、世事におもねたり、美装美食をこらすというようなことは更々無く、只ひたすらに仏道修行の枯淡な御生涯でした。そのようなご一生のなかにも数々の禅的逸話があり、その一部を画化して世に紹介するものがあります。

近時、宗教心道徳心がはなはだしく欠如しているため、物の考え方かたが独善的であり、利己的であります。そのため社会生活上いくたの不安不祥事が続出しています。この考え方かたは青年層に強く、それが少年層から幼年層へと波及しつつあるのです。今にしてこうした考え方かたを宗教心道徳心の涵養によって慈悲、感謝、報恩謝徳の考え方かたに置きかえ人情味豊かな明るい社会を取り戻すよう努めなければならぬと思います。

そうした意味において本書が、幼少年のみならず、老若男女多くの人びとの教化のための資料となることを祈ってやみません。

## 妙心寺の主要年中行事

二月	大般若	(一日～三日)
三月	開山大師降誕会	(七日)
四月	ねはん会	(十五日)
五月	春の彼岸会	(春分前後)
六月	恒例法会	(八日～十二日)
七月	天皇誕生日祝聖	(二十九日)
八月	山門懺法	(十八日)
九月	山門施餓鬼	(十五日)
十月	お精靈迎え	(九日～十日)
十一月	秋の彼岸会	(秋分前後)
十二月	花園法皇忌	(十一日)
	達磨忌	(五日)
	成道会	(十二日)
	開山忌	(十二日)
	歲末般若	(二十五日)
	祝聖	(二日・十五日)
	花園法皇忌	(十一日)
毎月		(十二日)

毎月

開山忌

花園法皇忌

聖

歲末般若

祝聖

# まさき山開ご

花園  
妙心寺



いまから およそ  
六三〇ねんほど  
まえのことです  
みほとけのおしえに  
み心をよせられた  
花園天皇さまは  
み位をゆずられて  
花園天皇さまは  
みおしえをうやま  
み位をゆずられて  
からは ますます  
われるようになり  
法皇におなりにな  
ると まもなく  
関山慧玄禪師  
(のちの無相大師)を  
まねいて 京都の  
花園に お寺を  
おひらきになりま  
した これが  
「正法山妙心寺」  
のはじまりです

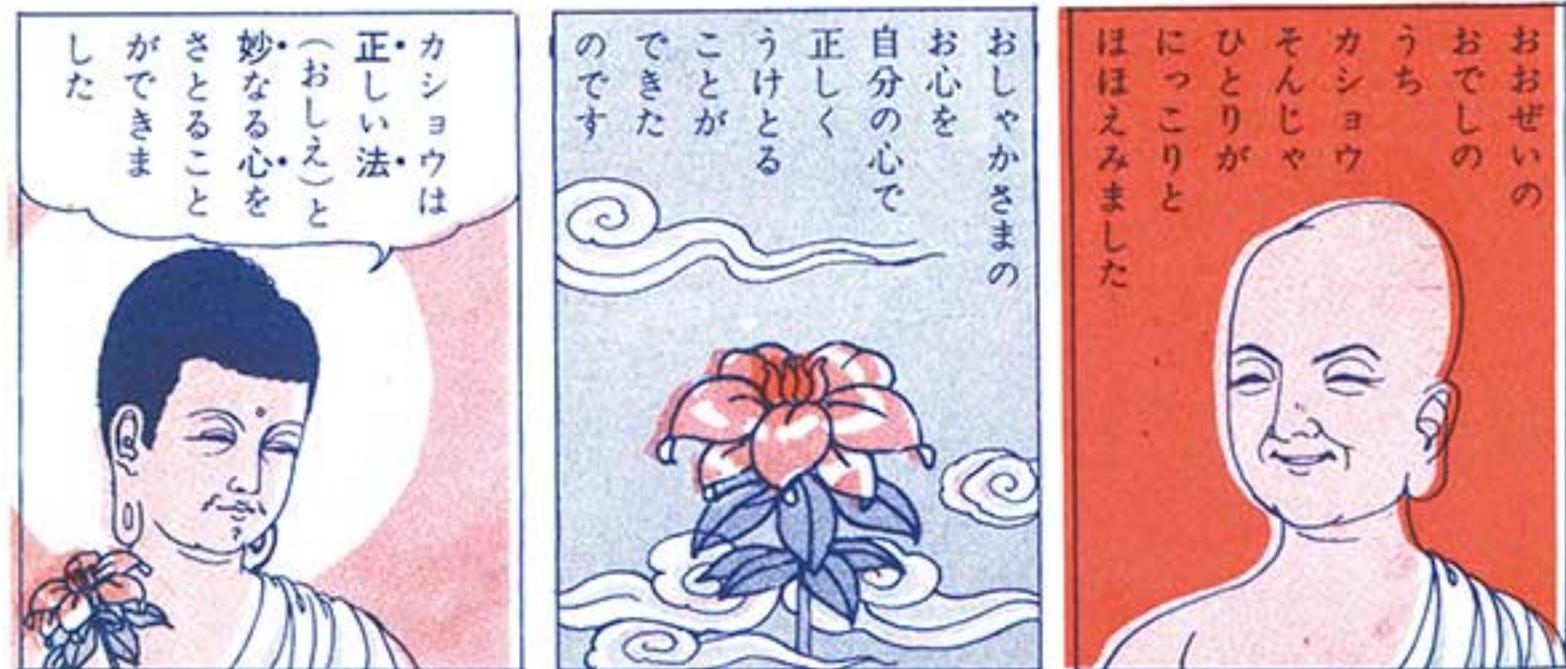
# 妙心寺のいわれ

そのころ  
国の中は  
南と北に  
わかれ  
それそれが  
天皇をたてて  
あらそつて  
いくさが  
つづき  
人びとは  
不安な日を  
おくつて  
います  
一日もはやく  
やすらかな  
世となるよう  
ねがわれた  
花園法皇さまは  
み心の  
よりどころを  
禅におもとめ  
になりました





そこで 大燈国師は  
正法山妙心禪寺と  
法皇さまにおすすめいたしました  
それはおしゃかさまが  
むかし 靈鷲山という  
ところで おしえを  
とかれたときの おは  
なしによって なづけ  
られました  
人びとは うまれなが  
らに「ほとけ」であり  
ます 「とうとさ」に  
もつ めざめるには 正しい  
法(おしえ)によつて  
心の目をひらくことで  
けれども正しい  
法は 心をもつて 心  
につたえるよりほかあ  
りません それには  
正しいおしえをうけと  
れる心——その心こそ  
大切であるという だ  
いじなおしえにもとづ  
いています



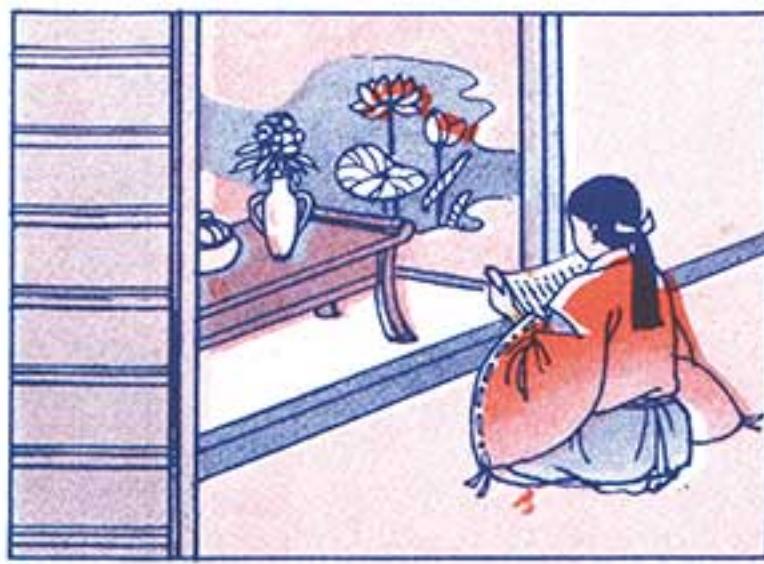
# 関山さま

おうまれ  
おひどり

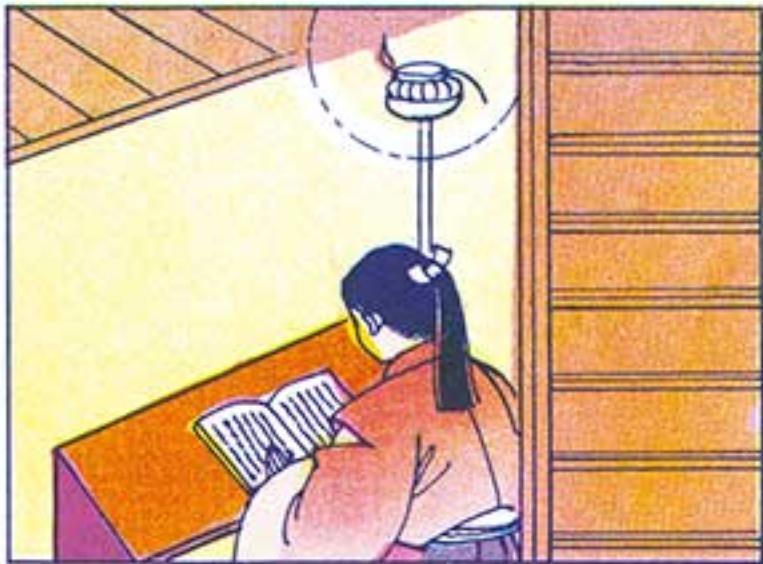
花法皇さまは、なられました。  
大塔國師は、關山慧空禪師をさがして、京都にむかえ、花園の離宮をお寺におしあげました。  
妙心寺のもといをひらかれたご開山の関山さまとはどういうおかたでした。





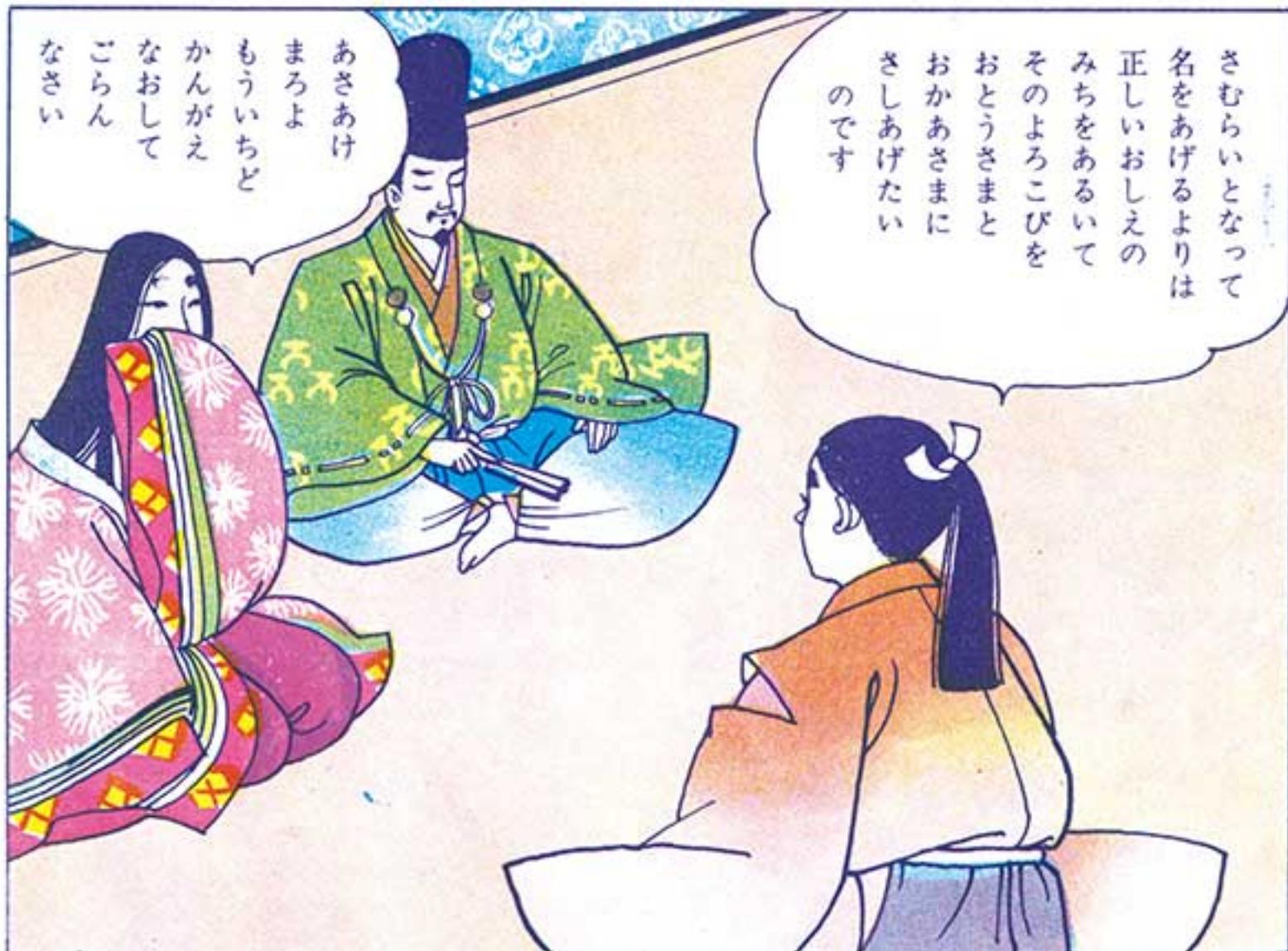






あさあけまろさま  
ごたんじょうの  
すこしまえのこと  
一二七四ねんと  
そのご一二八一ねん  
との二かいにわたり  
わが国に蒙古の大軍が  
おしよせてきました  
もうこ軍のほう  
台風のきせつに  
あたりましたので  
あらしのためには  
海にのまれてしまひ  
わが国にとつて  
さいわいでしたが  
このようなことが  
つづいてよのなか  
さわがしくなる  
ばかりでした  
けれどもくるしい  
時代になればなるほど  
正しい生きかたがあるはずです

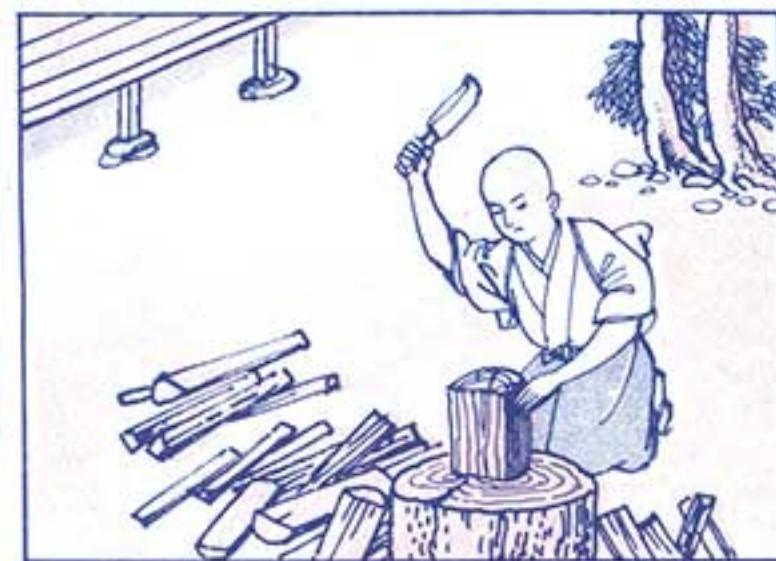
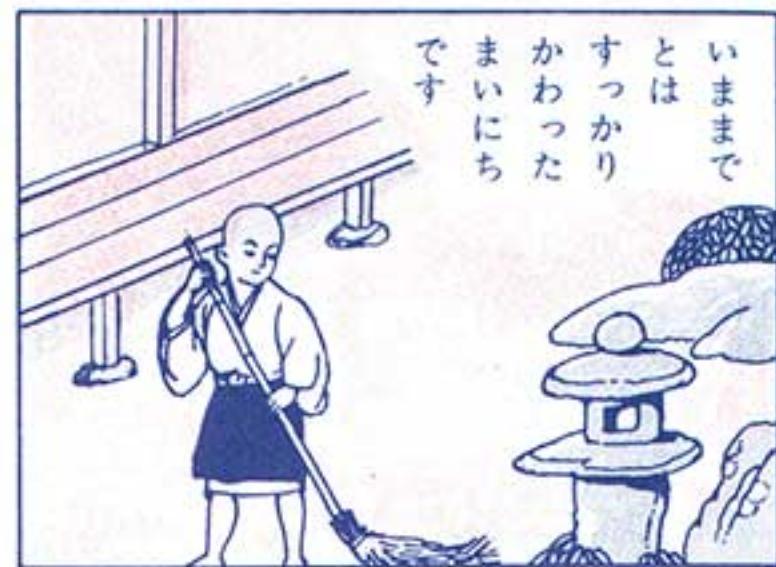




## 大応国師の おみちびき

とうとう  
ねがいが  
かなつて  
あさけ  
まろさまは  
月谷禪師に  
つれられて  
かまくらへ  
いくことと  
なりました

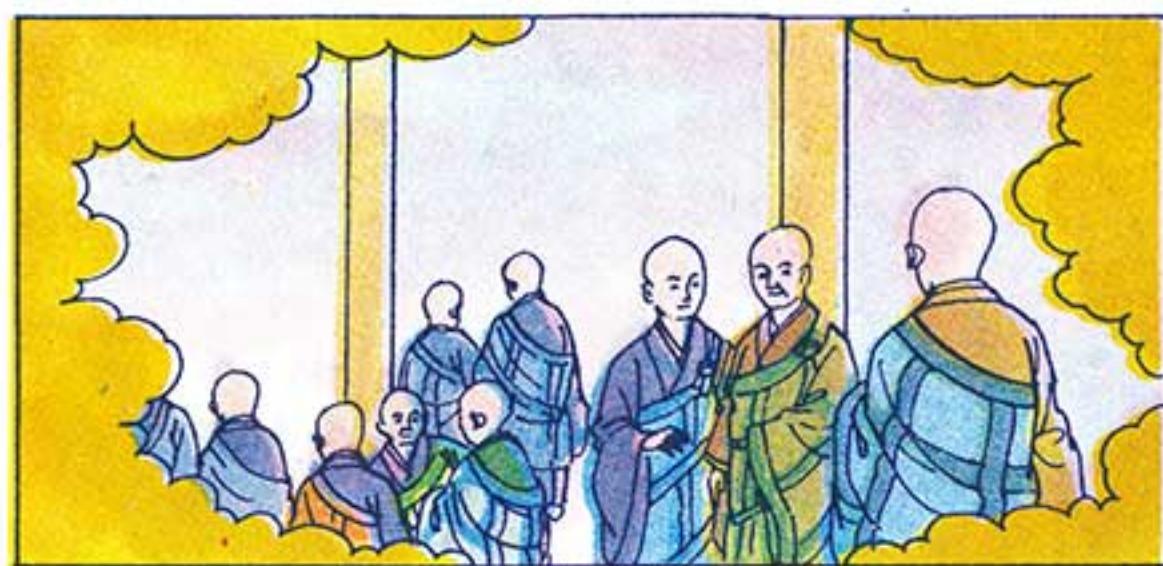
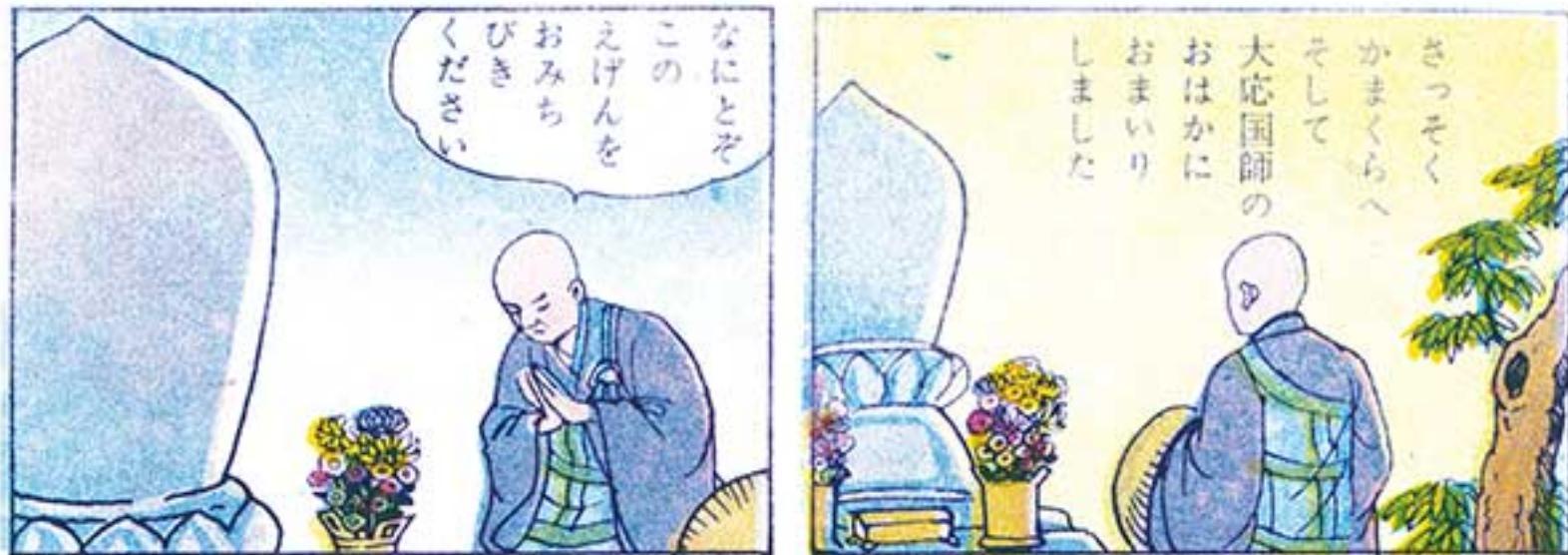




月谷禪師のもとで「禪」をおさめ  
てなんねんもたちました  
おしえの道はきびしく 月日は  
ながれるばかりです  
そのころ 九州から 德のたかい  
大応国師が かまくら建長寺に  
おはいりになりましたので さつ  
そく おみちびきをうけました  
大応国師には 月谷禪師も なが  
いあいだ おしえをうけています

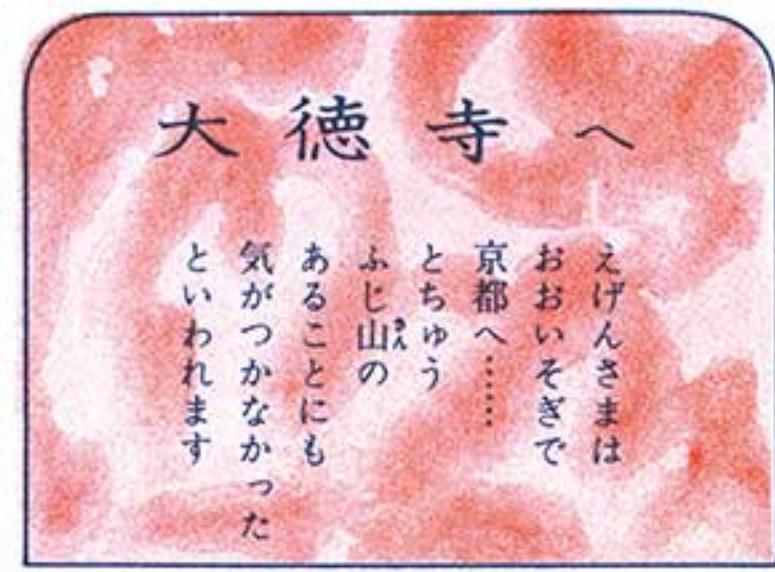






ちょうど  
建長寺で  
おおせいの  
おぼうさんがあつまり  
法要がおこなわれることとなりま  
した  
そのまえの日の よるの  
おつとめが はじまるときでした





おしえは  
きびしい  
ものでした

大燈国師の

